

8

85

4343

1-4

87

Handwritten text in a red square seal, including characters like 月 and 日.

8
4343
1-4

85

大正

花は高麗赤竹
おきてうねの端
舟は唐吉の金
漢人の端も此
おと十程の長

養子

けん

皇

全

昭和九年
九月二日
購求



下男 久七



けいざ 名山

相良 長門の女

けいせいの高尾



高齋典藏

今木傳七



清徳寺



おきり

濱田幸十郎



後者 勢 在 河 内 河 内 河 内

香 香 香 香
買 買 買 買
小 小 小 小
中 中 中 中
今 今 今 今

中 中 中 中
中 中 中 中
中 中 中 中
中 中 中 中
中 中 中 中

後 後 後 後

下 下 下 下
中 中 中 中
小 小 小 小
中 中 中 中
中 中 中 中

中 中 中 中
中 中 中 中
中 中 中 中
中 中 中 中
中 中 中 中

雜 唱 歌 長 崎 土 産 卷 之 七

造 物 二 重 ぶ ら 見 付 金 ぶ ら 後 原 以 折 白 下 落 子 也

に ち め 辨 め り と ち め や し 死 の り ち め ち め ち め ち め ち め

千 崎

千 崎

千 崎

千 崎

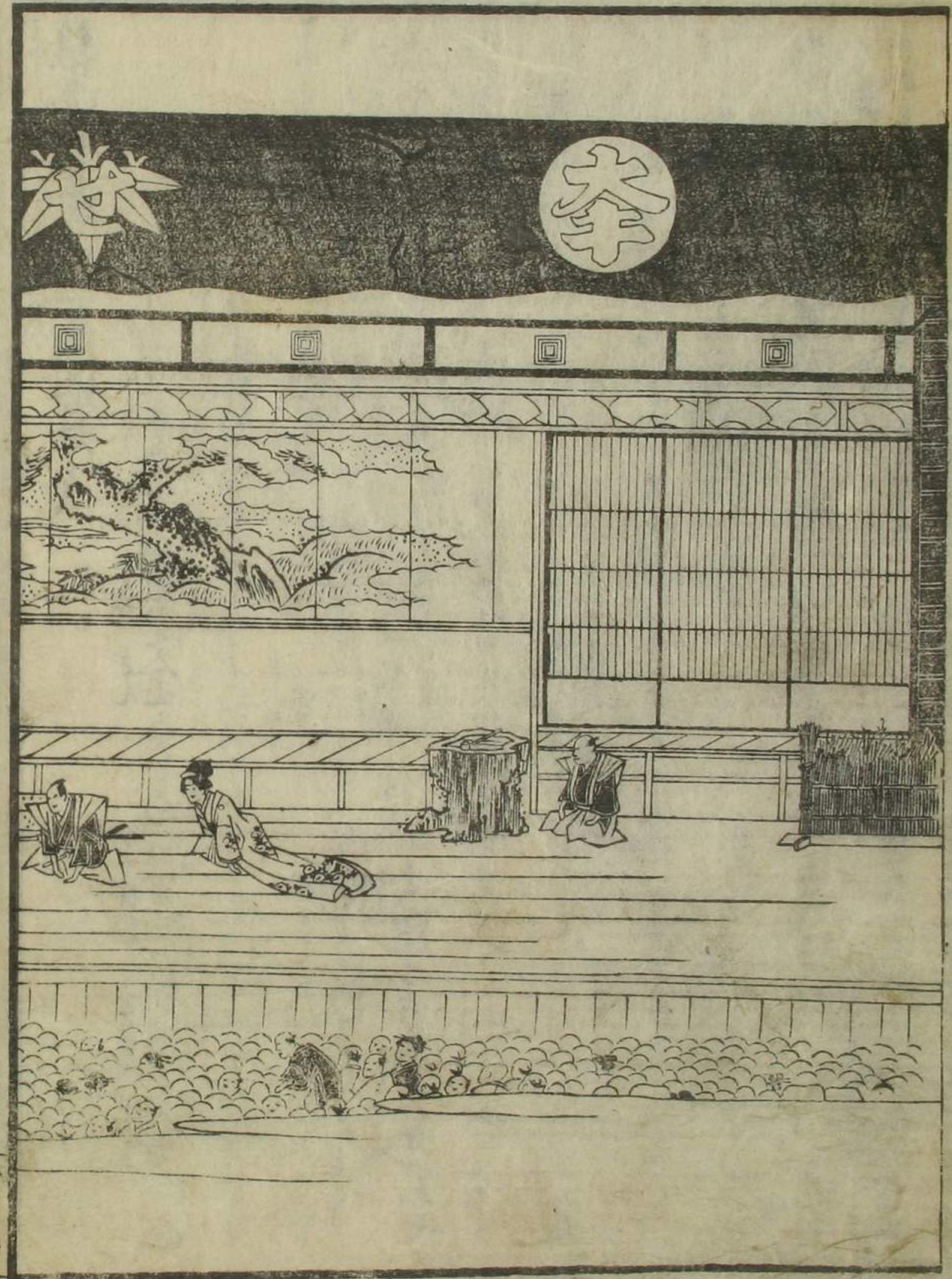
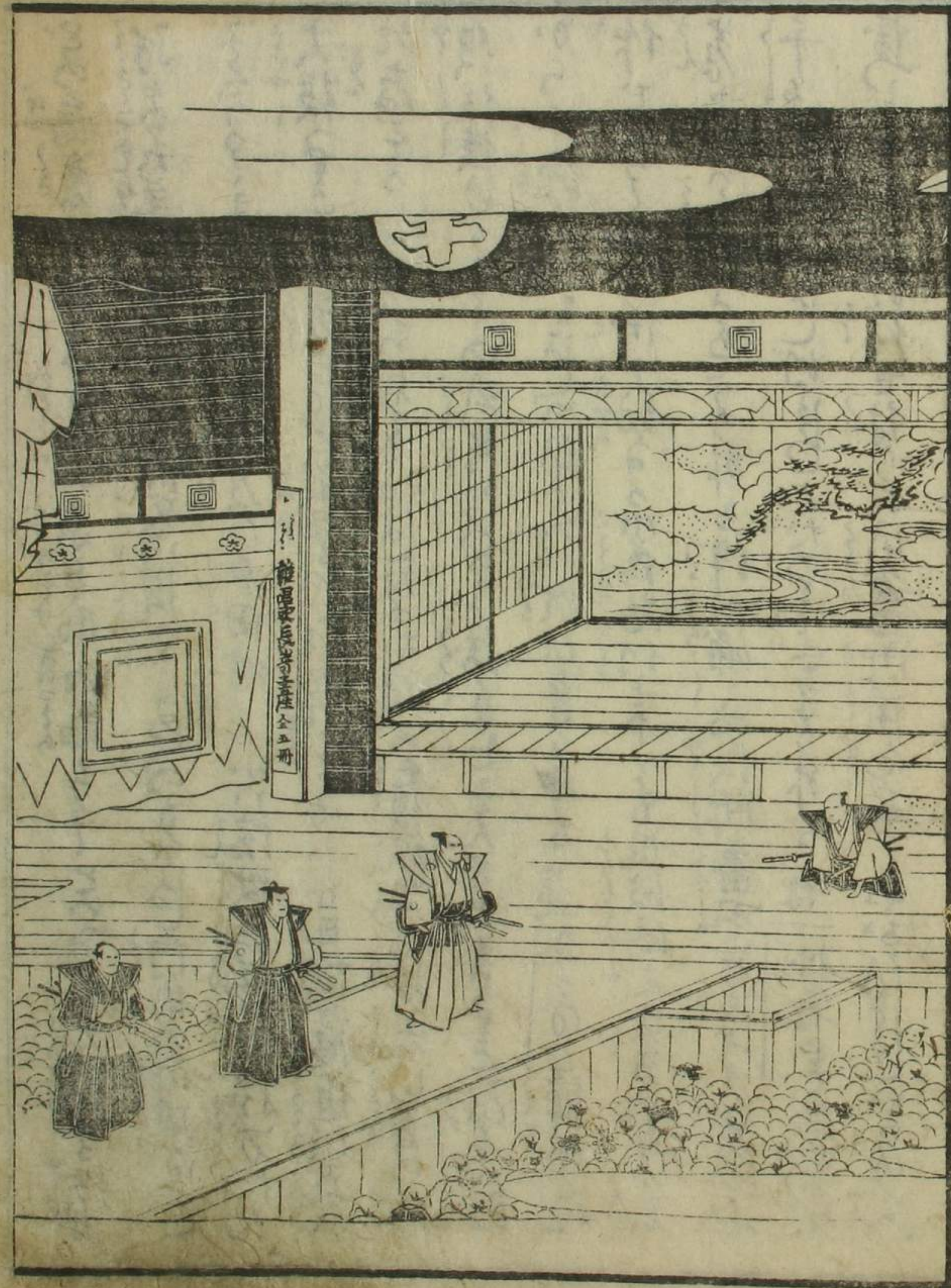
千 崎

千 崎

千 崎

千 崎

千 崎



どの病をいつこも身相家と助おあらうといふも大切なり
孫あつち年たるはよく伯父の弾正どののむとほ竹角の赤用は
さうらう、まうと宗友其及び戸田信他小信使が物船積万たん
大役さきの公芳の目と推察するに彈正どののむ日給の辰道に大
になさる 強これの恐を入はなるお知又音信才の拙者けなの大
役信使けうとこの式書いつう結ひとそんせぬ養まきびらん形
から千徳んのおさしびいんに然ひをり作る宗 さきの日と彈正ん
作せらう通し御大切なる御あ何とやとも風波海との受るまう
岩やどのをといふとり作る津く浦の役所番あけはりうま
千徳さうのおさしびいんに然ひをり作る 拙者さきも宗友
後どの加役に後せ付られけな御用向やもおびらういりの入

用これいふ方大なるおらぶの下の世伝にやとる事と仕まてらるるれも
けさき主人大なるまきとを傳に信使本家とローのいといひい
りてあけり 十は家利家又信使う 献上の産るこの名本
和名よいつてんさうと留めいつてんさうのめいといつる源山出谷とても
こまことお持され狼虎おられて迫らうり取まうといひさうはんせ
のらんとと後らるるまもいつてんさうといひはに中にふらうり取る毒
勿心ち解はせいふしたの口大者三千午に一は技をかうりうらふ女
信使献上の牙といふとるおらに系取あさるまてん宗友事の身や七
まてらけけまうはらうり守備いんや団んのとち千徳あつちけい
まうてらる宗友 ハワいん宗友はいつてらるりさうといへんさうのむいあま間
いおめて不浄おいらいしと後どのいんま——てらるりまきび思れら

十海のちと強 かしこぶらぶめういぬゆり合志 付

ましこ 深心侍能よ 強 柳沢元合せ見え終りままとあらま 強

泉の助のちやむ侍はして相良の家を押領 九助に威をふるん
我大なる侍りに行くとおひつら 千晴守らぬの生おめて 後日の

さるけらうらうとあがぬらまぬさるぬ 個のく 一めらんか 一めらん
侍能にらぬ申るにますとつけし 付 かしこありはしやまをばあし 付

此を空をひらうませぬ 拙者ともけ交の所用向一人に侍付られ
いと出然ひせ 一に宗左妻の侍付られ 拙者かやうく 加役とさう

に情さ何れと宗左妻のちと罪にらうてあさんと公せらる 新おき
此におの大さけり 愚意 船取とPのいせ 船取とい破損とせ 大合に

あむ 船取とめしき 一に侍付られ 船取とめ 宗左妻の侍に負せる 上まゐり 付

強 申しきとて 宗左妻の侍に 拙者かやうく 加役とさう 付

これと 強 申しきとて 宗左妻の侍に 拙者かやうく 加役とさう 付

小柄ハ宗七郎が正村のころよりまかせん 義と盛とをばあし けし 小づる け

よいてん草の一間は入屋宗七郎と料ばかり 拙者が強う行むを
よい 強 申しきとて 宗左妻の侍に 拙者かやうく 加役とさう 付

一 ちりうらあ人とのりおくなど 一に侍相とせと 付 やいこま 強

或は 天合のねぬゆ 一に侍相とせと 付 やいこま 強
いやく 侍能のちやむ 付 かしこありはしやまをばあし 付

だとりけ 付能のちやむ 付 かしこありはしやまをばあし 付
中らんども 天合のねぬゆ 一に侍相とせと 付 やいこま 強

ちりうらあ人とのりおくなど 一に侍相とせと 付 やいこま 強
とぬも 入るやうに 中らんども 天合のねぬゆ 一に侍相とせと 付



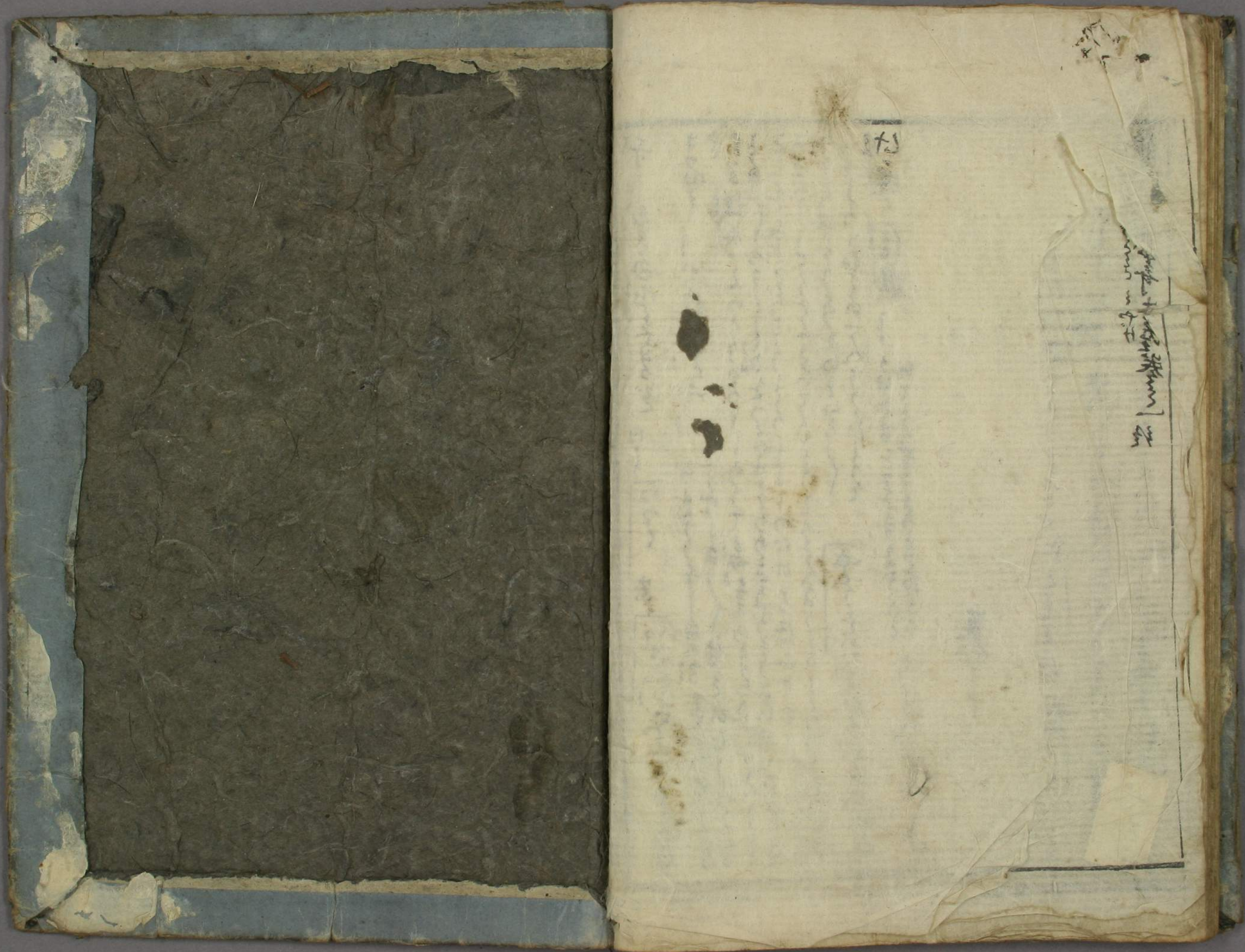
まろころ 付 [ハツ]と申すのでらり外るは後にとりおせしこと明に
外まばさうごくにおまらりませぬ 千 志書にらて切後を留め
付 志書のまろころや申すも切後ハ付のり宗七うぬハ益ごく
高生侍ひつらうと勝り首うでませ 千 かつて 付 [ハツ]まら留
まろころハ、ア、まろほどころりともうぬまの科人ばにら
運をらけに致せしあの後さうやく 千 宗七徳玉にけらうて
まろせ 千 かつて 付 おもひまらうぬ 千 付作らや何後を勤
める 付 [ア] 千 宗七家中の仕置一團の政道は是後の政るるの
相良ぶのに限らぐ天下の定法さや宗老職と勤める 付 [カ]
さうま 千 其後月にあらうとて急忽であらうぞ 付 つい 千
付 [カ]と申すごくに極まり宗七と切後とせ宗のせんがハ何者とする

付 いやそのぞり 千 宗七が九難ぶりのらう 付 ともそのぞり 千
たいせらるる宗のせんぞは扱ハはらうに宗七とらうたがる 付 [ア] 千
そさうまのぞりあつらひし 千 一人いづく 付 [ア] 千
外財扱極の大まけりそを配りこの仲を破配してら外る
あつらひの大強弱でら外る 宗 何財受の番見とて宗七配配
あつらひのあらんとおひひ由へ出配のせんぞらて留めはらうとて
宗七の物失はらうし 付 いや大切なる信使市用の物おふんらと
りてあ練のりのそ外後配とりて只今せんごまら中てら外る
宗 何市用ての物おふい 付 宗七並どの船積万担とて
とらひるころてらうとや市用の物おふんらしてとて外るは配の
とらひる番見とげしたとら幸ひよ全にらるづた物おハ扱へはしと

いつとらんて詮せんを罷うらつて細付はたが日敷とらん屋敷のぬ
ち一交に申るさまを色合忘ははるめあうら何申らん養志を以て
かゝる曲者引度とてぶらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
てよあはるけ一通とてあひらしてても下席りからうらうら
ま一息よめぬはるせめて一人あつてもぶつはけんと文忠は
たう凡るえげしきまの園やうけ一通がせんぎのひざうら一ま
かつしか思取のま月たけきまのこのことごとくまゆりま
ゆり外りト一通とて家一うら女花出りしと只今そのお物
ふつれせんぎさうちうらうらうらうらうらうらうらうらうら
かゝるトけ内保の一通と解何く虎の皮五百兩の三十間の毛
纏二十枚大人参三百斤珠玉十箱右の通うたうらぬぬ代金

二千両お後一甲の田家左衛門どの。何葉トよめあける代金二
千両お後一甲の田家左衛門どのくくくくくくくくくくくくく
のはりぐ家左衛門小限の私教はしまささささささささささ
せうと何白さまが家左衛門とてや信使の荷物とてぬぬぬぬ
いや一彈正さるうらや何のぬ作せられ外りけ家左衛門めぬぬ
ぬてを改まぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
まじし何のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
とあへて個一とてぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
かゝるぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
家うらやゆらしてぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ





Handwritten note on the right edge of the page, oriented vertically. The text is difficult to decipher but appears to be a list or a set of instructions, possibly related to the book's content or binding.

